

平成21年度

第三十回 大好き いばらき 作文コンクール

入賞
作品集



平成21年11月
大好き いばらき 県民会議

はじめに

大好き いばらき 県民会議 会長

茨城県知事 橋本 昌

第二十回 大好き いばらき 作文コンクールにおきまして、入賞の榮に輝きました皆様にご心からお祝いを申し上げます。

大好き いばらき 県民会議では、家族や地域の絆を育むことを目的とした子育て支援、花と緑で潤いのある環境づくりを進める花いっぱい運動、地球温暖化防止に向けたエコライフ運動や地域コミュニティの活性化など、「やさしさとふれあいのある茨城づくり」を進めるため、各種事業に取り組んでおります。

その一環といたしまして、「わたしが発見！ いばらきの文化」をテーマに作文を募集しましたところ、県内の小・中学生及び高校生から四、四〇四編の応募をいただき、厳正な審査の結果、本作品集に掲載の五一編が入賞となりました。掲載している作品は、いずれも様々な伝統文化などについて紹介するもので、家族や地域とのふれあいの中から自らが感じた、未来に伝えたい茨城の文化が生き生きと素直に表現されており、改めて茨城の奥深さ、素晴らしさを感じることが出来るものです。

大好き いばらき 県民会議といたしましては、この作品集を多くの県民の皆様にお読みいただき、いばらきの文化を知っていただくことにより郷土愛が醸成され、県民運動の輪が一層広がっていくことを期待しております。

最後に、審査にご協力いただきました方々をはじめ、ご支援・ご協力を賜りました関係者の皆様にご深く感謝申し上げます。

平成二十一年十一月

目次

◆はじめに	1
◆入賞作品	5

◎茨城県知事賞

パパのだつべよ	結城市立城南小学校	一年	藤木りん	5
私が日立で守りたいもの	日立市立油縄子小学校	六年	石井里佳	5
レッドポアローの秘密	城里町立桂中学校	一年	所朝美	6
守りたい伝統	県立下妻第一高等学校	二年	吉田和沙	7

◎茨城県議会議員賞

りゅうじんつりばしのこいのぼり	那珂市立菅谷東小学校	三年	田崎宇宙	10
なまつつたつて、いいべよ	ひたちなか市立阿字ヶ浦小学校	四年	黒澤彩華	10
知恵がまつた茨城の郷土料理	県立並木中等教育学校	二年	石井萌加	11
茨城町の郷土の歴史を探る	県立茨城東高等学校	三年	鈴木翔太	13

◎茨城県教育長賞

かば山じんじゃの火わたり	桜川市立権穂小学校	二年	渡邊颯美	15
わたしが好きないばらきの民話	ひたちなか市立田彦小学校	五年	佐藤咲	15
京都旅行で知った「水戸」	水戸市立内原中学校	二年	浅野真穂	16
わたしのふるさと自慢	県立水戸第三高等学校	一年	塙花甫里	18

◎茨城新聞社長賞

わたしと童よう	龍ヶ崎市立龍ヶ崎小学校	三年	古関葵湖	20
---------	-------------	----	------	----

だいすきいばらき……………	行方市立小高小学校	四年	箱根明果……………	20
歴史・文化が地域の元気を取り戻す……………	つくば市立筑波東中学校	三年	大塚彩夏……………	21
わたしの故郷自慢……………	県立水戸第三高等学校	一年	照沼菜津美……………	22

◎大好きいばらき 県民会議 理事長賞

いばらきのおいしいもの……………	古河市立古河第一小学校	一年	長谷川丸……………	24
ほんごうちくのおまつり……………	土浦市立山ノ荘小学校	一年	前野栞里……………	24
ぼんづな……………	行方市立三和小学校	一年	湊賀悠聖……………	25
ぼんづな……………	鉾田市立徳宿小学校	二年	鬼澤大地……………	26
たのしかったかつらぎキャンプ……………	つくば市立葛城小学校	二年	岩崎ゆい……………	26
たのしいおっしやいなあ……………	土浦市立乙戸小学校	二年	富山芽生……………	27
ぼくたちをまもっているかんのんさま……………	桜川市立雨引小学校	二年	宮田蒼一朗……………	28
麦わらぶち……………	筑西市立五所小学校	三年	水越匠……………	28
天王様のひみつ……………	日立市立河原子小学校	三年	廣瀬翼……………	29
百年前の土のリサイクル……………	桜川市立真壁小学校	三年	田中亜実……………	30
ぼくたちの「成沢ささら」……………	日立市立成沢小学校	四年	瀬谷匡史……………	30
私の西蓮寺の楽しみ方……………	行方市立玉川小学校	四年	田中彩菜……………	31
茨城の表玄関わが取手……………	取手市立取手小学校	四年	彦坂勇弥……………	32
むらさき色のちかい……………	筑西市立大田小学校	五年	菊池康平……………	33
未来に伝えたいもの……………	日立市立宮田小学校	五年	佐藤花菜……………	34
平和を伝える花火と大銀杏……………	水戸市立緑岡小学校	五年	浅野万大……………	35
私達のまつりつくば……………	つくば市立二の宮小学校	六年	杉山采里奈……………	36
茨城弁で交通安全……………	茨城町立大戸小学校	六年	菅谷滉貴……………	37
方言で輪……………	水戸市立見川小学校	六年	永田一紗……………	38
伝統芸能「水戸大神楽」……………	水戸市立双葉台小学校	六年	鬼沢美穂……………	39

ずっと守っていききたい文化	桜川市立桜川中学校	一年	岩 淵 穂乃香	40
常陸太田の雪村うちわ	常陸太田市立北中学校	一年	會 澤 祥 子	41
大地の恵みに囲まれて	常陸太田市立北中学校	一年	鈴 木 七夏海	42
ふるさとの味・ソイ・ソース	美浦村立美浦中学校	一年	渋 谷 杏 梨	43
茨城のフルーツ食文化	常陸太田市立南中学校	二年	島 根 諒 士	44
祇園祭に参加して	桜川市立桃山中学校	二年	櫻 井 未奈子	46
祖父のすみつかれ	筑西市立下館中学校	二年	鈴 木 千 陽	47
茨城弁の存在	小美玉市立美野里中学校	三年	福 田 一 希	48
みんな笑顔に	常陸太田市立水府中学校	三年	平 根 達 也	49
つないでいく伝統の絆	笠間市立笠間中学校	三年	大 関 祐	50
守る、伝える	県立水戸第三高等学校	一年	飯 村 結 花	51
芸術にあふれたいばらき	大成女子高等学校	一年	鈴 木 絢 子	53
つないでいく郷の伝統	県立下妻第一高等学校	一年	関 美沙都	54
わたしの故郷	県立下妻第一高等学校	二年	羽 子 田 千 尋	56
つないでいききたい伝統の泳ぎ	県立茨城東高等学校	二年	新 井 一 生	57
◆第二十回 大好き いばらき 作文コンクール実施要項				60
◆平成二十一年度応募状況				62
◆審査委員				63

パパのだっぺよ

結城市立城南小学校 一年 藤木 りん

わたしのパパは、おはなしをするときさいごに、だっぺよとかならずいいます。

さいしよは、なんにもかんがえてなかつたけど、パパみたいに、だっぺよというひとといわないひとがいるから、ママになんできいてみたら、いばらきけんのほうげんだつていわれました。ほうげんつてなあにつてきいてみたら、いばらきけんのひとがつかうことばだつていわれました。なんだかとてもへんなことばだつておもったけど、じぶんでもつかつてみたらやつぱりへんでした。だからパパに、こんどからだっぺよつてつかわないでおはなししてねつていいました。

パパはだっぺよはつかわなくなりしました。そのかわりパパは、あんまりたのしそうにたくさんおはなしをしなくなりしました。なんでこのごろあんまりおはなししないのつてきいたら、まちがえてだっぺよつていつちやいそうだからきをつけてるんだよつていわれました。わたしはつまらなくなりしました。

あるひ、わたしがきけんあそびをしていたら、パパが、だめだつぺよと、おおきなこえでさげびました。びっくりし

たけれど、パパとわたしはわらつてしまいました。

パパは、だっぺよがとってもにあうパパだつておもつたから、ごめんねして、もうつかつていいよつていいました。わたしは、パパがつかういばらきけんのほうげんのだっぺよがだいすきになりました。パパは、いばらきけんのほうげんをたくさんつかつてるとママがいつてたから、パパのつかういばらきけんのほうげんをたくさんさがしてみたいとおもいました。

私が日立で守りたいもの

日立市立油縄子小学校 六年 石井 里佳

「山が近くにあるところ、海が近くにあるところはたくさんあるけれど、海も山も近くにあるなんて幸せだねえ。」

東京に住む私の祖母がよく言います。

日立は工場の町ですが、私の家の側には、その山と海を結ぶ川があります。この鮎川は、私たちに季節ごとに自然の姿を見せてくれます。

その中でも私が好きなのは、六月と十一月です。鮎川のほとりの小豆洗不動尊から流れ出て鮎川へ流れ込む清水は、周りの交通量からは考えられないくらい澄んでいます。ここでは六月終わりから七月初めにかけて、ゲンジボタルを見ることができます。ゲンジボタルは、本当にきれいな水でしか育たないそうです。なぜなら、そのえさになるカワナナが清流にしか生息しないからです。夜、小豆洗のほくらまでかい中

電灯を持つて歩いて行きますが、ほこらへの細い坂道を下りると、もうかい中電灯は必要ありません。ホタルのポワンとした光が夢の中のように浮かんでいてからです。ホタルが飛ぶのは、一週間くらい暑い日が続いた後です。梅雨時なので、毎年今日あたりかなあと、お天気とにらめっこしながら楽しみにしています。

十一月になると鮎川にはサケが戻って来ます。サケは川の流れに逆らって必死に泳いで、卵を産みに来るのです。十一月の初めのころは河口付近で、まず、体を慣らしています。そして天気の良い日に一気に川を上ります。雨上がりだと水量があるのですが、増水していないときは、岩などで体がすり切れて、体中傷だらけになりながら川を上ります。川底の浅いところなどでは、行ったり来たりをくり返しながら何度も何度も挑戦するので、見ている私たちも思わず、

「がんばれ！ こっちの方が深いぞ！」

と叫んでしまいます。中には、途中で力ついて死んでしまうサケもいますが、全力でがんばるその姿を見ると、「どこからそんな力が出てくるのだろう。」というも思います。応援したくなるのには、もう一つ理由があります。それは、このサケたちは、私たちが放流した稚魚だからです。「帰って来てくれてありがとう。」「川や海をきれいにしておいて待っていたからね。」そんな気持ちでいっぱいになるのです。

ホタルもサケも、そして季節ごとに土手に咲く草花も、みんな昔からあるものにちがいありません。でも町がどんどん都市化されていく中で、日立の人々が自然にも目を向けて守り続けてくれたおかげで、私たちはこのようにいろいろな体

験ができるのです。自然との調和のとれたこの日立の町を私も守っていきけるように、ゴミの分別やリサイクルなど、ふだんの生活の中からできることを意識していきたいと思えます。

レッドポアローの秘密

城里町立桂中学校 一年 所 ところ 朝 あさ 美 み

「おっこいしょ。草でもむしってくつかないか。」セミが鳴き、太陽がかんかん照りの真夏日に私のおばあちゃんは、立ち上がりがりながらそう言った。

私のおばあちゃんは農家をやっていて、ナス、ネギ、トマト、キュウリ、トウモロコシなどたくさん野菜を育てている。中でもおばあちゃんが力を入れているのが赤ネギ、別名レッドポアローと言うネギだ。レッドポアローのレッドは英語で赤を意味し、ポアローはフランス語でネギのことを言うらしい。この名前の通り普通のネギの白い部分が赤いのが外見上の特徴で、食べるととても甘みがありやわらかい。色も鮮やかでアントシアニンと言う成分が風邪や目にも良いそう

だ。

また、このネギは那珂川流域の沖積土と呼ばれる土地で栽培しないと独特の甘みややわらかさが出ないのも特徴で、城里町の中でも旧桂村の坏地区だけで栽培されている。

「こんな暑いのにまたやるの？」と、おばあちゃんに言うのと、決まって返ってくるのは、「やんなきゃネギが育たねえ

べ。」と言う言葉だ。

ネギが出荷されるまでには、種まき、草取り、仮植え、株分け、本植え、消毒、収穫して荷造り、出荷という工程がある。夏の暑い時期から真冬の時期まで休む暇も無く働く。

最近、景気が悪く会社を辞めた人が農業でもやってみようか、などといった就農する人がいるようだが、そんな気持ちではとても出来るものではない。農業を甘く見ては困る。

私も以前、ネギを抜く作業を手伝ったことがあるが、ネギに傷を付けずに抜く事すら出来なかった。おじいちゃんがネギを植える畑を一生懸命耕しているのを見て自分もやってみたが、私がつと一列終わった時には何列も終わっている。おじいちゃんの経験や正確さには、かなう事など一つも無かった。

日ごろから農業と向き合っている人のように、農業をやりこなすなど簡単なことではないのだ。

私は幼い頃からこのネギを見て、食べて、育ったが、特に興味を持つたりした事はなかった。

しかし、改めて考えるとどこでも作ることが出来るものではないこと、他のネギと違う特徴があること、作業がとても大変なことなどを考えると「レッドポアロー」はたいしたやつだと思えた。

おばあちゃんは、このネギを主に道の駅かつらに出荷している。そして、おばあちゃんのネギがおいしいと言つて、わざわざ自宅まで買いに来るお客さんもいる。そんな時はいつも大サービスタ。おばあちゃんはネギが売れることも喜んでいますが、見ず知らずの人が買いに来てくれることに生きがい

を感じているようだ。

自分の仕事に人に認められ感謝されるのは素晴らしい事だ。だから夏の暑さや冬の寒さにも耐えることが出来るのではないだろうか。

おばあちゃんはもう少しで七十歳になるが、とても元気だ。これも、野菜作りやネギのパワーのおかげではないだろうか。

地域の特産品である「レッドポアロー」は、たくさんの方の努力や苦勞の結晶だ。その結晶が無駄にならないように、深谷ねぎや下仁田ネギに並び「城里のレッドポアロー」と呼ばれるようなネギになってほしい。ネギは普通、料理の主役にはなれない。いつも脇役だが無いとものさびしいし、日本の食卓には欠かせないもの。そんな存在だが、レッドポアローが、いつか主役になれる日がくるといいなと思う。

私がネギや農業について知っていることはとても少ないが、城里の誇るレッドポアローのよさを少しでも世間に広げていきたいと思う。

守りたい伝統

県立下妻第一高等学校 二年 吉田和沙

「ああ、どうして私の街はこんなに田舎なのだろう。」窓から見える外の景色は田んぼや畑ばかりで、遠くに買い物に行く時は、最寄りの駅まで何十分も車を走らせなければならぬ。おしゃれな服やかばんや靴は近くのお店には売っていな

いし、便利なはずのコンビニエンスストアも、近くなければ不便である。私は年を重ねる度に、もつとおしゃれなものがたくさん売っていて、交通機関も発達している、華やかな都会に住みたいと考えるようになっていた。もちろん高校を卒業したら東京の大学に通って、将来は田舎を出たいという夢も自然と描くようになっていた。そして自分が生まれ育った茨城の田舎に、何の思いも無かった。しかし、この夏のあんな小さな出来事をきっかけに、私は自分の街、田舎の良さについて考えるようになった。

その出来事とは、今年の夏の、祖母の住んでいる地区のお祭りの時の事である。この地区では、大人がかつぐ神輿とおはやしが、決められた家々を周り、最後には神社に戻って来るといふもので、その地区の人達が力を合わせて行うお祭りである。私も小さい頃は毎年のようにこのお祭りの日に祖母の家に行き、神輿やおはやしを見に行っていた。私だけでなく、いとこ達やおじやおばも集まって、親戚一同お祭りを楽しんでいた。また、祖母の家の庭には一本の大きな木があり、そこにカブトムシやクワガタが蜜を吸いにやってきていたので、私と妹と年下のいとこ達は家から虫籠を持ってきて、カブトムシやクワガタを捕まえて楽しんだ。そして近くの家に神輿とおはやしがやってくると、みんなで見に行き、もらったアイスを頬張った。おもしろい遊具や屋台があるわけではないが、私達はなぜかとても楽しかったのだ。しかし私や妹が中学生、高校生になると、他に用事ができて、毎年来ることもなくなってしまう。いとこ達もカブトムシに飽きる年頃になり、だんだん祖母の家に来なくなっていた。そ

うやってこのお祭りと共に味わった楽しさや夏の思い出を忘れかけていた今年の夏、私は久しぶりにお祭りに行ってみた。そこは、私の小さい頃と変わっていなかった。二十代や三十代の若者が、年配の方と一緒に声を張り上げながら神輿をかつぎ、あの頃と同じおじさんが、篠笛を吹き太鼓をたたいている。神輿が来ると、小さな子供もおじいちゃんやおばあちゃんも、いろいろな世代の人々がみんな同じ笑顔で集まってくる。蝉が鳴くこのにぎやかな夜には、涼しい風が田んぼや畑の上をゆつくりと通り過ぎていく。私はこの光景を見て、この風を感じた時に、何だか心が温かくなった。「なんかいいな。」と思った。どんな形を変え機械化し、情報化する都会と違って、この田舎には、昔から変わらない光景が広がっている。それはお祭りのにぎやかさだったり、人々の笑顔だったり、涼しい風だったりと様々だが、どれも大切なこの地区の宝なのだ。そしてこれが、茨城のこの街のこの地区の、文化や伝統なのだ。私はそう思った。今まで早く出て行きたいとばかり思っていたこの田舎が、この時はとても誇らしく思えた。毎年かつぐ小さな神輿も、おはやしも、おじいちゃんもおばあちゃんも、それにずっと前に建てられて、今はもうボロボロの祖母の家も、その庭にある大きな木も、全てが私には輝いているように見えた。そして私の心の中に、ある強い気持ちが生じた。それは、この伝統をこの先ずつと、一生守りたいという思いだ。もちろん大きな事件でも無い限り、このお祭りは続いていくだろう。しかし私が守りたいと思うのは、この時感じたすべてのものである。人々の笑顔も、涼しい風も、広々として緑いっぱい自然も、驚くほ

どゆつくり流れている時間もすべてだ。この田舎でしか味わうことのできないものを、一生守りたいと思ったのだ。

私は今、茨城のこの街の良さを、自信を持って言うことができる。その良さとは、社会が都心部を中心に機械化、情報化してだんだんと変化していく中で、私の街には、ここ田舎には、昔から変わらずゆつたりとした幸せな時間が流れていることだ。そして、代々大切に受け継がれてきた伝統が、人々の手で今も守られ、誰もがそれを感じることができるとだ。私は見て、聴いて、感じたこの田舎の良さを忘れずに、これからもずっと誇りを持ち続けていきたいと思う。なぜならこれが、伝統を守るために私ができる事だと思っからである。

